

レジリエンス研究教育推進コンソーシアム令和元年度第2回幹事会議事要旨

1 日時：令和元年7月22日(月)10時00分～11時50分

2 場所：防災科学技術研究所 東京会議室

3 出席者：林（会長）、甘利（副会長）、遠藤

陪席者：中島（防災科学技術研究所）、坂入（〃）、前山（〃）、平岡（セコム）、石濱（筑波大学）、秋葉（〃）、鈴木（〃）、松原（〃）（敬称略）

4 議事

(1) Joint Seminar 減災との共同シンポジウムについて

遠藤委員より、資料1に基づき、Joint Seminar 減災との共同シンポジウムの開催概要等について説明があり、次のとおり一部修正のうえ承認された。

➤ 【開催概要（資料1-1）】

- ✓ シンポジウム開会挨拶を「林 春男 レジリエンス研究教育推進コンソーシアム 会長（防災科学技術研究所）」に、閉会挨拶を「河田 恵昭 Joint Seminar 減災 代表（関西大学）」に修正。
- ✓ お問い合わせメールアドレスを「r2ec@risk.tsukuba.ac.jp」に修正。

➤ 【ポスター（資料1-2）】上記同様の修正を踏まえた上で、p.3の青いデザインを採用。最終調整は事務局が行う。

➤ 【レセプション予算案（資料1-5）】アルコールあり、会費1,000円とする。

➤ 【会場前方の掲示物】縦1m×横3mの布製とし、上から順にタイトル、サブタイトル、日時・場所、主催両機関ロゴを表す。

➤ 【会場入口の掲示物】共同シンポジウムポスターのA0版を掲示する。

(2) 共同シンポジウムにおけるパンフレット配置・ポスター展示について

遠藤委員より、昨年同様、参画機関によるパンフレット配置やポスター展示を受け付ける旨説明があった。8月に事務局から希望有無を照会することとなった。

(3) 共同シンポジウムの旅費について

遠藤委員より、コンソーシアム関係者の共同シンポジウム旅費は筑波大学が支払う旨説明があった。なお、10月25日(金)（幹事会出席者は24日(木)も）の宿泊費も支払い可、交通費は新幹線計算、ホテルは各自予約、日当は無し。8月に筑波大学から利用駅や宿泊有無を照会することとなった。

※赤字部分は、運営委員会報告時は削除。

(4) 筑波会議の旅費について

遠藤委員より、10月3日(木)筑波会議旅費は筑波大学が支払う旨説明があった。なお、日帰り交通費のみ支払い可、日当は無し。8月に筑波大学から利用駅を照会することと

なった。

(5) リスク・レジリエンス工学学位プログラム設置報告書に記載する学外実習受入承諾書（案）について

遠藤委員より、資料2に基づき、学外実習受入承諾書（案）の経緯について説明があり、次のとおり一部修正のうえ承認された。

- 【スケジュール】「～7月31日(水)」において、「受入承諾書（案）審議（メール）」を「受入承諾書（案）報告（メール）」に修正し、幹事会の承認事項を参画機関に報告する形とする。
- 【実習受入承諾書】において、「勤務日数〇日程度の実習」を「〇日程度の学外実習」に修正（4か所）。

なお、次のやりとりがあった。

- （甘利副会長）実習生を無条件で受け入れるものではないことを確認したい。
→（遠藤委員）学外実習受入承諾書の留意事項の第2項にあるとおり、実習生を無条件で受け入れるものではない。

(6) 協働大学院に係る協定（案）について

遠藤委員より、資料3に基づき、令和2年度の協働大学院教員（現在の客員教員）が所属する参画機関と筑波大学との間で、設置認可から令和2年3月までに協働大学院に係る協定を締結する必要がある旨説明があった。8月以降に筑波大学から対象機関に照会することとなった。なお、次のやりとりがあった。

- （甘利副会長）法務審査が必要となるため、内容が固まった段階でデータを送付してほしい。
→（遠藤委員）内容が固まった段階でデータを送付する。
- （甘利副会長）対象参画機関の全てで内容が同じである必要はあるのか。
→（秋葉氏）同じである必要はなく、機関ごとに内容の修正があり得る。

(7) 客員教員の追加について

遠藤委員より、客員教員を追加する希望や提案があれば、筑波大学まで申し出ていただくよう依頼があった。

(8) 令和2年3月の運営委員会開催機関について

遠藤委員より、候補機関は日本電気と電中研であり、今後調整する旨説明があった。

(9) 参画機関所属者向けリスク・レジリエンス工学学位プログラムリーフレットについて

遠藤委員より、働きながら筑波大学で学ぶメリットをまとめたリーフレットを作成中であり、完成次第参画機関に配付する旨説明があった。

(10) その他

遠藤委員より、文部科学省による卓越大学院の公募に筑波大学システム情報工学研究科が応募準備を進めており、他研究科や国内外の大学・研究機関を含めた構想の中で本コンソーシアムを卓越大学院のコンソーシアムの中に入れることについて説明があり、承認された。なお、次の補足説明があった。

- 防災科学技術研究所、セコムを準拠点として位置付け、その拠点責任者を林会長、甘利副会長に依頼したい。
→（林会長・甘利副会長）承諾する。
- 本コンソーシアム参画機関に新たな負担をかけることは無い。
- 筑波大学内の選考を経るため、申請できない可能性もある。

また、次の意見があった。

- （林会長）科学・工学を自然科学のみによって捉えるのではなく、セキュリティ、セーフティ、食品衛生、医療、介護、福祉、家政といったキーワードに関連する、自然科学以外の科学を含めて捉えて幅広く構成した方が卓越と呼ぶにふさわしい。特に、安心というキーワードは世界的にみても日本だけで考えられているものであり、優位性・独創性が高い。
- （甘利副会長）自然科学のみによって捉えられた科学・工学は、生活と乖離しているきらいがある。安心を考える際には、生活科学という観点で考えなければならぬ。
- （林会長）人材養成目的は、「人生の苦境を乗り越える力を持ち、あらゆる現場で活躍できる人材を養成する」とするのがよいのではないか。
- （林会長）工学は設計をする学問であるが、自然科学に依拠する必要はない。例えば、社会工学は社会科学に依拠して設計をしている。
- （甘利副会長）科学は、現象を何らかの形（数式に限らず、文章も）で書き下すものであり、工学は、その書き下したものを使って設計・社会実装することにより人々の生活を豊かにするものである。特に、平和、愛情、リスク、セキュリティ、レジリエンスといった概念は数式によって書き下すことはできないため、人々の感覚・価値観の共通項を文章などによって書き下さなければならない。このように多様な切り口を考えることが、卓越と呼ぶにふさわしい。
- （林会長）自然科学、生命科学、人文科学といった科学のカテゴリーは、現象のそれぞれの側面を支配している。これらを統合させることにより、科学が統一できる。特に近年は、計算機科学やプログラミングスキルが発達したことにより、異なる表現形態を統合できる可能性がでてきており、本件応募の中核となりうる。

以 上